

I 自立に向かう子どもたち

—自立につながる自己決定を—

副校長 井崎 明

1 いま、求められること

本校の研究は、過去、「自己教育力」を育てることを根底におきながら、諸側面に焦点を当てて以下のような主題について研究を行ってきた。

昭和61年～「めあて追求の授業」

平成元年～「個が生きる授業」

平成5年～「豊かな感性を育む」

これらを通じて共通していたものは、一言で言えば、子どもが自ら考え、自ら判断し、行動できる資質や能力、つまり、自己教育力を育むことであった。しかも、めあて追究の学習の場をどのように構成するかから、次第に、子ども一人一人の深い内面における学習の成り立ちへと課題が深まってきた。そして、今、子どもの内面を問題にしたとき、学習場面だけでなく、子どもの暮らしの全体に視野を広げ、学習の力とそれを支える豊かな人間性をトータルなものとしてとらえる必要が生まれてきたのである。そこで、暮らし全体を通じて子どもにどんな力をつけていくべきか、広い視野からもう一度検討し整理してみた。基本的な生活習慣を始め、人とかかわり、表現力など、様々な要素をも視野に入れ、私たちのめざす子ども像を、自立に向かって歩み続ける子どもの姿である、自立に向かう子どもたちであると考えているに至っている。

中央教育審議会は平成8年の答申において、

「自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」

「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心」

「たくましく生きるための健康や体力」

などが、これからの子どもに必要であるとし、それが「生きる力」であるとした。本校で言う「自立に向かう子ども」とは、こうしたものを身に付けようとする傾向性をもった子どもの姿である。具体的な子ども像として表せば、

- ① 基本的な生活習慣が身に付いている
- ② 自分の思いが表現できる
- ③ 他とかかわりができ、思いやることができる
- ④ 自分自身についてわかり、自己評価できる
- ⑤ 自ら学ぼうとする意欲がある
- ⑥ 行動に責任が持てる
- ⑦ 自分で考え、判断し、行動できる
- ⑧ 自分の願いに向かって努力できる

などをあげることができる。また、こういう力（資質、能力、傾向性）を身に付けるためには、

- ① 他とかかわる場（他の人、もの、環境）
- ② 体験の場（実感や達成感のある体験、考え判断し行動する基礎となる体験）
- ③ 自己学習の場（課題、見通し、自己決定、表現、振り返り）

を通すことによって、他人事ではない、実感のともなった学習が成立することが大切である。

2 自己決定を大切にす

自立とは自分の行動を自分の責任で決定すること、つまり行動が自己決定に基づいていることである。行動を自己決定する背後には、自分自身に対する理解があり、自分にふさわしい目標、自分にあった方法の自己決定が伴っている。また、これまでの自己決定が自分に何をもたらしたかについての自己評価と反省があり、それが自己決定の根拠となっている。根拠をもった責任の持てる自己決定であれば、結果についての責任も自分で引き受けることができる。自分の行動が自己決定と自己評価によって裏打ちされていることで、自分への理解や信頼が深まっていく。

また、自己決定は「自分だけで決定する」ことではない。他と十分かかわりを持ち、相互に影響しあいながら、しかも、自分の責任において、自分で決めて行動することである。

佐藤学先生は本校での講演の中で、これからは「分かち合い学習」「恵み合い学習」が大切だと述べられた。「他人の力を借りながら自分を生み出す」学習、一人一人の違いが響き合う学習である。

「自立」も「自己決定」も言葉だけが先行したのでは形骸化する。自己決定が自己評価につながり、自己評価が次の自己決定の根拠になるようなサイクルが成り立っていること、そして一方では、他とのかかわり、分かち合い、恵み合いが成り立っていること、この縦横のつながりが重要である。したがって、自立につながる自己決定を大切にするためには、授業を次の視点から見直すことが大切である。

- 追究するめあて（問題）が子どもの内面から発したのになっているか。
- めあて追究の過程に、「気づく・感じる」→「考える・創造する」→「表現する・実践する」→「振り返る」のサイクルが生まれているか。
- 教師や仲間などの「人」、資料・教具などの「もの」、活動の場、選択・決定の場などの「場」とのかかわりが生まれているか。
- 授業の中に自己決定の場があり、その子らしい個性と他とのかかわりが生きた決定になっているか。それが、内発的な振り返りにつながっているか。
- 学習したことで、自分自身への新たな気づきが生まれているか。

3 子どもに学ぶ教師

ある知識や技能を身に付けることについては結果を量的に把握することもある程度できるが、本校の研究のキーワードになっている自立、自己決定、自己評価などは、どれをとっても外から見えにくく量的に把握することが難しい。例えば課題解決の方法一つをとっても、どんな方法を選択したかよりも、何を求めて、何を根拠に選択したのか、どんな見通しにたっているのかなどの内面を見とることが必要である。また、子どもの活動は教師の予想するパターンに当てはまらない場合も当然ある。教師は子どもの個性的な学び方を認め、子どもの試行錯誤を価値あるものととらえた指導が必要である。子どもの学び方に学ぶことである。一人の教師が40人の子どもを指導することを思えば限界もある。校内研究授業などを通じて、大勢の教師で協同で観察し、子どもの学び方を分析する必要もある。これからの教育では、教師が連携して子どもを見る目を磨き、「子どもの学びに学ぶ」ことがますます重要になると思われる。